

工業生産性の向上

家内制手工業

農家が家内で一つ一つ生産しました。これでは品質は良くても、たくさん作れません。品質を維持しつつ、生産量を増やすことが課題でした。

問屋制家内工業

・「都市の豪商」(問屋といいますが)が原材料や道具を農家に貸し与えて製品に加工させ、その製品を買い取ってほかへ販売する手法をいいます。

・原材料の仕入れ、道具の調達、製品の加工、製品の販売を分担して行うことで、すべてを一人でやる家内制手工業に比べて生産量は増大しました。

工場制手工業

(マニファクチュア)

労働者の分業と協業で生産する

河内木綿、桐生足利の絹織物

伏見・灘の清酒

・問屋は「工場」という一つの場所や原材料や道具、そして作業する人を集めて工場内で作業させました。そして作業した人に報酬を支払いました。この報酬を賃金といい、賃金を得る行為を労働といいます。「織る」「染める」「巻く」などの生産工程に分けて分担することを分業、一か所で協力して行うことを協業といいます。

豪農の商業進出がさかん

→ 在郷商人 とも呼ばれる

・たいいてい庄屋などの村役人を兼ねています。田畑を買い集めて小作に出して小作料収入を得たり、地主手作をしたり。そしてさらに、村で生産された商品を買収して地方の小都市に売りに行くこともするようになりました。この時のもう一つの顔が、在郷商人です。大坂や江戸の株仲間が商売の競争相手で強力なライバルです。在郷商人はたいいてい村役人を兼ねていますが、広く各地に商売に行くので、あちこちの村の村役人(=在郷商人)と広く顔見知りになり、村のかき根を越えた広いつながりができます。

商品作物生産の普及の影響

- (1)米農家の3倍の収益が出るというわれ、地方でも学問や趣味に打ち込めるようになりました。紅花の出羽村山の最上徳内など地方も人材が出ました
- (2) 甲斐の郡内地方という山奥の地方でも、桑と養蚕で貨幣を獲得できるようになって米は買ってきて食べられる様になり、人口が増えました。
- (3)商品作物作りに夢中になる結果、麦や雑穀の生産がおろそかになり飢饉に弱い社会になりました
- (4)商品作物生産には、刈藪や草木灰などの自給肥料ではとても足りず、干鰯やペ粕などの金肥を購入したり、宮崎安貞の農書を買ったり、先行投資が必要でした。作物が災害で全滅すると、農家は借金でつぶれて江戸へ出て無宿人に没落です。

→ 本百姓体制 が解体

幕府・藩の専売制の導入

- ・年貢増徴が限界に達した幕府や藩は、商品作物生産の収益に目をつけました。専売制をして、領内の商品作物を藩が安く強制買い上げの制度を始めました。
- ・商品作物生産の収益が、ひたひたに汗して働いた農民ではなく、幕府や藩に吸い上げられました。
- ・専売制は、商品作物を大坂や江戸の株仲間へ買い集めさせてもうけさせ、幕府や藩は株仲間から運上・買加を納めさせる制度です。

農村荒廃対策

特に江戸に近い北関東(下野・常陸)

松平定信… 北関東出稼ぎ制限令

あ 二宮尊徳〔報徳 仕法〕下野国

い 大原幽学〔性学〕下総国

関東地方は江戸に近い小藩がたくさんありました。特に農民没落が北関東で多発したため江戸周辺の治安が悪化しました。

幕府の無宿人対策

関東取締出役

・10人が2人1組で関東八州を巡回し、領主の違いを越えて無宿人や犯罪者に目を光らせました。50たたき以下の罪への刑の執行権も持ち、恐れられました。(八州廻りともいいます)

寄場組合村

・領主の違いを越えて約50か村を組合にまとめて関東取締出役の犯人捜査・逮捕・刑の執行などの補佐をさせました。

国許

→ 在郷商人が領主の違いを越えて連絡、1000か村が連合して起こした法廷闘争。

- ・株仲間商人による専売制反対を1000か村の村役人(=在郷商人)が奉行所に合法的に訴え出る法廷闘争です。
- 1000か村の村役人の連絡態勢ができています。
- ・領主ごとに行政が分かれている幕藩体制が、領主の違いを越えて結束する様になった社会に不適合を起こしています。

天保の大飢饉

1836 甲斐で 郡内騒動

1836 三河で 三河加茂一揆

郡内も加茂も米が取れない商品作物地域です。米は買って食べていました。米価高騰で命がなくなったり、はじめは武器を持たず規律正しい惣百姓一揆でしたが、命も生活も捨てている大量の無宿人が参加できると変質、竹やりや火縄銃で武装して強盗・放火など無秩序化、幕府代官所は暴れまわる無宿人になすべがなく無力をさらけだしました。リーダーの辰蔵は豪農で、辰蔵の家も無宿人に打ちこわされてしまったほどですが「大量の無宿人を生み出した幕府政治が悪い」と処刑を恐れず堂々と言い放ちました。幕府・藩は初めて武器で一揆を鎮圧しました。

1837 大坂で 大塩の乱

大塩平八郎は知行合一(ちこうごういつ)を重んじる陽明学者でした。中江藤樹、熊沢蕃山を尊敬していました。全国から年貢米・納屋米が集中するはずの大坂ですら天保の大飢饉では米不足で米価暴騰、それなのに大坂町民を大切にしようとする立場の大坂町奉行が幕府にこびるために江戸に大坂の米を送って大坂をますます米不足にしたことに激怒、大坂町奉行の与力(大阪府警)を辞職して、私塾洗心館の蔵書売り払って600両を作り、それで米を買って貧民に配りながら、大砲を4門、洗心洞から取り出して大坂城を砲撃しました。大坂の町は4分の1が焼失しましたが大坂町民は大塩大明神と祀りました。

在郷商人の成長と“天下の台所”大坂の低迷

・松平定信が 江戸地回り経済圏を育成

・上方からの物資補給に頼らなくても、関東地方の生産力を高めて江戸の物価を下げようとした。醤油は成功しました

・ 在郷商人の台頭

・在郷商人が自分の村の商品を買収して地方小都市に直接売りに行ってしまうので、全国の商品が大坂を経由しないで流通する事態になり、大坂に商品がこれまでのようには入荷しなくなってきたのです！